

## 第二章 イエスが面白い

新約のヘブライ人への手紙一章一節、二節に、このように書かれています。

神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。

これが、キリスト教なのですが、では、「御子によってわたしたちに語られた」というのは、どういうことなのでしょう？

旧約時代には、神の代理人とも言うべき預言者（予言者ではなく、預言者というところに注目してください。つまり、単なる未来を言いあてる予言者ではなく、神の言葉を預かって語る、神に代わって語る人という意味です）が、神の言葉を語ってきたのですが、新約時代には、神ご自身が人となって語ってくださった、ということなのです。それが、「イエス・キリスト」と呼ばれる方だ、と信じるのが、キリスト教なのです。

ヨハネによる福音書の格調高い書き出しも、そのことを示しています。

初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。（ヨハネによる福音書一章一節～五節）

さらに、ヨハネによる福音書は、こう続けます。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた。（ヨハネによる福音書一章一四節）

この「言」が、「イエス・キリスト」なのです。一四節の「わたしたちの間に宿られた」というのは、直訳すると、「わたしたちの間に彼のテントを張った」となるそうです。つまり、「生活を共にされた」ということです。とつても簡単に言ってしまうと、「イエス・キリスト」と呼ばれる方の生き様と死に様によって、神の真理を示された、ということになります。

そこで、キリスト教では、「イエス・キリスト」のことを簡単に言うと、「人となられた神」と信じます。ここが、キリスト教信仰の一番大切なポイントになります。さらに、もっと突っ込んで言いますと、三位一体の神の第二の人格と言うことになります。ですから、この三位一体の神を否定するのは、キリスト教とは言えません。これを否定している「エホバの証人」（ものみの塔聖書冊子協会）や「モルモン教」（末日聖徒イエス・キリスト教会）や「総一協会」（世界基督教統一神霊協会）などは、私たちからするとキリスト教とは認められないのです。

「三位一体」ということも簡単に説明しておきましょう。「位」というのは、もともと「位格」という漢語から来たもので、今で言えば「人格」と言っていると思います。三つの人格が一体と

ということなのですが、ちょっと聞くと、三人の神様が一人なのだと聞こえて、分かりにくくなります。ひっくりかえして、一人の人の三つの人格と考えてみてはどうでしょう。たとえば、石川和夫という人格は、牧師、夫、父という三つの顔を持っている、というふうに。その呼び方は、関係によって違ってきます。礼拝で会衆に向かって石川和夫は、牧師、家に帰ってきて妻の前にいる石川和夫は、夫、息子たちの前に立った石川和夫は、父です。

こう考えてみるとどうでしょうか。

父なる神………創造者、審判者、訓練者、	→超越性
子なるキリスト…啓示者、仲介者、同伴者、	→具象性
聖霊なる神………伝達者（神から人へ、人から人への愛の）、	→内在性
（気づかせる神）	

たとえば、何か大切な真理に気づかせられた、という場合、聖霊に助けられた、と呼びますし、聖書や礼拝において、具体的に愛や知恵に恵まれたという場合、主イエス・キリストによって、と呼び、現実の出来事で、単なる偶然ではない、と感じた場合、神の摂理によって、と呼んだりします。しかし、その場合でも、神、キリスト、聖霊の間に厳密な差はあまりなく、どのようでも呼ぶことができます。私は、この三位一体の神を、まことに行き届いた神と呼びます。天の高いところにおられて、「お前たち、愛し合えよ」と命じておられるだけではなく、愛するとは、こういうことだと私たちと同じ人間になって具体的にお示しくださり、さらに、愛に気づくようにといつも私たちの内側から働きかけてくださるからです。三位一体については、これくらいにして、「イエス・キリスト」に戻しましょう。

「イエス・キリスト」という名称は、今日、すっかり固有名詞となっていて、誰知らぬ者はいないほど、ポピュラーになっているのですが、「イエス」が名前で、

「キリスト」が姓だと思っている人が意外に多いようです。恵泉序学園大学学長の荒井献先生がNHKラジオ第二放送で、「イエス・キリストを語る」というシリーズで放送をされたのですが、そのテキスト（NHK出版、一九九三年四月一日発行、一八頁）の中で、こうっておられます。

「実は私は十年ほど前に、ラジオのある番組で『イエス・キリスト』というテーマで話をしたことがある。その時、放送のための録音に立ち合った担当者が私に、『先生の放送を聴くまで自分はイエスのことを姓名の名、キリストのことを姓だと思っていました』とつぶやいた。私はそれを聞いて啞然とした。しかし、キリスト教にあまりなじみのないわが国において、『イエス・キリスト』を『名』と『姓』だとは思わないまでも、『キリスト』は『イエス』の別名ぐらいに思っている人が多いのではなかろうか。」

確かに、新約聖書の中でも「キリスト」が固有名詞のように用いられている場合もあります。「主イエス・キリスト」と言われている場合などは、そう受け取られても仕方ありませんが、本来、「キリスト」は普通名詞だったのです。「油注がれた者」を意味するヘブライ語の「マシーアッハ」（いわゆる「メシア」）がギリシア語に翻訳されて、「クリストス」と呼ばれました。「油注がれた者」は、旧約時代には、三種類の人がありました。王、祭司、預言者が、そうです。この人たちは、それぞれ神に代わって統治し、裁判を行い（王）、神に代わって罪の赦しを宣言し（祭

司)、神に代わって警告したり、教えたり、励ましたり(預言者)しました。それが、亡国となった「バビロン捕囚」時代から、ダビデ王の子孫に亡国となったイスラエルを開放する救世主が現われるという期待が生まれて、その救世主をメシアと呼ぶようになったのです。従って、「イエス・キリスト」という呼称は、ナザレ出身で十字架につけられてよみがえったイエスが、その「メシア」だという告白であったのです。ちょうど、「クリントン大統領」と言えば、クリントンという人がアメリカ大統領である、ということを表しているのと同じです。つまり、「イエスがキリストである」という意味になるのです。それが、「イエスは人となられた神である」ということにもなったのです。

そこで、この「イエス」という方について、どう受けとめるかが、二千年の歴史の中で、常に問題となってきました。中世の聖画に見られるように、イエスの後に後光が射していたり、頭の上に金の輪が見えたりしていたのでしょうか?もし、そうであれば、信仰に熱心だった当時のファリサイ派の人たちや祭司たちが、イエスを処刑するなんてことは決して起こらなかったはず

です。

私は、イエスが「人となられた神」だというとき、完全な人間となられた、という意味で、人間を超えたスーパーな神であった、とは思いません。もしも、神であったなら、祈ったりする必要はなかったはず。創世記二章のアダムを、本来あるべき人間を示したものと言いましたが、イエスは、神の命令に忠実に従って、決して「善悪の知識の木」からは取って食べなかったアダムを生きられたのだと信じています。神に従順に従って生きるとは、どんなことを示されたのであって、それは「人となられた神」にしか出来なかったことだったのです。そのような見方によって福音書のイエスを見てみると、非常に多くのことを知ることができます。「イエスが面白く」なります。